

ジャパンファウンデーションでは、「地中海アラブ音楽シリーズ」第2弾企画として、今年3月、チュニジアの歌手ロトフィ・ブシュナーク氏を招き、東京・岐阜・京都・大阪の4都市でコンサートを実施しました。世界のポピュラー音楽に造詣の深いピーター・バラカン氏に、現代アラブの音楽とコンサートの模様について、エッセイを寄稿いただきました。

ロトフィ・ブシュナーク
日本公演に寄せて

朗々と響く声、 そしてアンサンブル

ピーター バラカン
Peter Barakan
ブロードキャスター

ピーター・バラカン●ロンドン生まれ。ロンドン大学を卒業後、1974年来日。音楽系出版社勤務を経て、放送の仕事を開始。「ウィークエンド・サンシャイン」(NHK-FM)などの音楽番組のほかに、海外ドキュメンタリーを紹介する「CBSドキュメント」(TBS)、日本の魅力を世界に発信する英日2カ国語番組「Weekend Japanology」(NHKワールド)にも出演中



ブルースと西アフリカの音楽

昔々、中学生のころに初めてブルース(ブルース)を耳にして、その響きに非常にエキゾチックなものを感じました。それまで聴いていた多くのポピュラー音楽のメロディは五線紙に書けるものでしたが、特に一人で歌われる弾き語りのカントリー・ブルースとな

イスラーム文化と歌の節回し

そのころにはすでにアフリカの音楽も聴くようになっていたことが大きいと思います。とりわけ、西アフリカのマリ、セネガル、ギニアあたりの歌を聴き始めたら、そこにブルースの基となる音があることが明らかでした。

比較的最近のことです。

と、そのように記録できない微妙な音程が多く、その歌い方による独特のテンションが生まれます。また、そんな微妙な音程差によって感情表現はとても豊かになるので、白人のポップ・ミュージックに比べて強烈な印象を受けました。

しかし、慣れるまである程度、時間がかかりました。そして、例えばギターの腕前が絶妙なロバート・ジョンソンの魅力はすぐに伝わっても、非常に素朴な伴奏しかない無名のブルース・シンガーの、歌そのものの味わい深さまで堪能できるようになったのは



→ロトフィ・ブシュナーク。ウードを弾きながら、朗々とした声で歌の細かいニュアンスを歌い分けた。
←ロトフィ(中央)の歌とダイナミックに絡み合う見事なアンサンブルを聴かせた演奏陣たち。左から、ムニール・ズゴンダ、アブデルバシール・メトサーヘル(ともにヴァイオリン)、タウフィーク・ズゴンダ(カヌーン)、ロトフィ、アブデルカリーム・ベンハリール(チェロ)、ムハンマド・マブルーク(レク)

撮影：高木厚子(どちらも)

著名なブルーズ研究家のロバート・パーマーの著書『デープ・ブルーズ』のなかに興味深い記述があります。彼によると、ミシシッピ州のある特定の場所です。その場所から離れるほどアフリカの濃度が薄くなることでした。いろいろとアフリカン・アメリカンの歌を聴いているとかなり説得力を持つ仮説のように思いますが、でも、アフリカの歌自体には、ブルーズをいくら聴いても気がつかない要素があったのです。それはイスラームの影響です。

西アフリカの歌の節回しは、やはりイスラームの文化でしょう。コンゴやジンバブエなど、サハラ以南の国々の歌にはないこの独特の節回しは、大西洋を渡った奴隷たちとともにアメリカに持ち込まれ、少しずつ変化して行ったものの、先日亡くなったマリ北部の歌手アリ・ファルカ・トゥーレを聴くとイスラームの文化とブルーズとのつながりが明確です。

イスラームの文化と言ってももちろん国によってかなりの違いがあるわけですが、最近ユッスー・ンドゥールやチオン・セックといったセネガルの歌

手たちがエジプトのオーケストラをバックにアルバムをつくるというおもしろい試みが行なわれています。これらによって私のように北アフリカの音楽をさほど聴いていなかった者も、西アフリカとはまたかなり異なった音感に触れるきっかけになりました。

胸の深くから響く声

このようなことを考えさせられたのは、チュニジアの歌手ロトフィ・ブシユナークのコンサートを観たあとでした。ある程度、モロッコやアルジェリアのポピュラー音楽を聴いてはいましたが、チュニジアの、しかも古典的な響きを持った彼の音楽は新たな体験で、彼がいかに有名な人物であるかという予備知識もないままコンサート会場に受けました。

楽器編成はロトフィの歌とウード、カヌーンというアラブ世界のチャター、ヴァイオリン2人、チェロ、そしてレクと呼ばれる小型のタンバリンです。楽曲にはきちんと作曲されている雰囲気があり、かつては異様な感じがしたクオータートーン(半音と半音の中間の音)の多いメロディのアンサンブルに

は頭がぐらくらくするような勢いがありました。

即興の要素も十分あり、両手の指にピックを付けて演奏するカヌーンの早弾きやヴァイオリンによるソロパートの名人芸はルーマニアあたりのロマ(ジプシー)の音楽を彷彿させるものでもありました。チェロはときどきロトフィの歌のメロディと同じラインをなぞったり、あるいは歌やヴァイオリンとの「会話」を呼応式で奏でたり、多様な味つけを加える楽しい要素でした。そして小さなレクが入ると、厳粛だったリズムが急に賑やかになり、自然と体がのつてくるものです。

しかし、何よりもロトフィ自身の歌が素晴らしく、胸の深いところから朗々と響く彼の声は見事な器です。音程の細かいニュアンスを自在にコントロールしながら歌い上げ、歌詞の内容がわからなくても、深い感動を引き出すのに十二分の力量です。

日本では接する機会が特に少ないアラブ音楽を味わうこの機会に感謝しながら、ジャパンファウンデーションが今後も定期的にこのような形のコンサートを企画することを祈りたいと思います。